どんぐり

　たかいたかい　やまのてっぺんに、おおきな　くぬぎのきが　ありました。それはそれは　ほんとうにたかくて、そらにとどいているように　みえました。

なつのおわり、くぬぎのきは　えだいっぱいに、ちいさな　どんぐりのあかちゃんを　つけました。

「ああ、はやく、おおきくなりたいなあ。」

「もうすこしだよ、もうすこしだよ、まっておいで。」

と、くもがやさしくいいました。くもはあめとそうだんして、どんぐりのあかちゃんに　あめをふらせました。

「どんぐり　どんぐり、おおきくなあれ。はやく　おかあさんのような　すばらしい　くぬぎになるんだよ。」

と、いいながら。

　やがて　どんぐりのあかちゃんは、どんどん　どんどん　おおきくなりはじめました。

　そうして　あき、このはが　あかくそまるころには、もうりっぱなどんぐりのみに　なりました。

「もう　てを　はなしてもいい、おかあさん。」

「ああ、すきなところへ　おゆき。そうして、しっかり　ねを　はる

んだよ。かあさんは　ほら、こんなに　たかいから、いつでも　おまえたちを　みているよ。」

ころころ　ころころ、どんぐりは　さかみちを　ころがって　やまのまんなかや、いけのふちにおちました。でも、たったひとつ、ふかいふかい　たにのなかに、おちてしまったどんぐりが　いました。そこは、ひがあたらなくて、いつも　じめじめしていました。

「ああ、ぼく　ひとりぼっちになっちゃった。さびしいなあ。それに、ここは　なんて　つめたいのだろう。あかるいところ、あたたかいところへ　でていきたいなあ。」

どんぐりは、すこし　ねが　はえかけて　いましたが、いっしょうけんめい、とびあがろうと　しました。　ぴょん　ぴょん　にど　さんど。でも、うまくいきません。

「だれか、ぼくを　たすけてえ。」

でも、こえがちいさいので　とおくには　とどきません。

もういちど　よびました。かすかな　こえを　かぜがききました。

「ぼうや、まっておいで。わたしがふいてあげよう。」

でも、かぜに　ふかれたのは　このはだけでした。

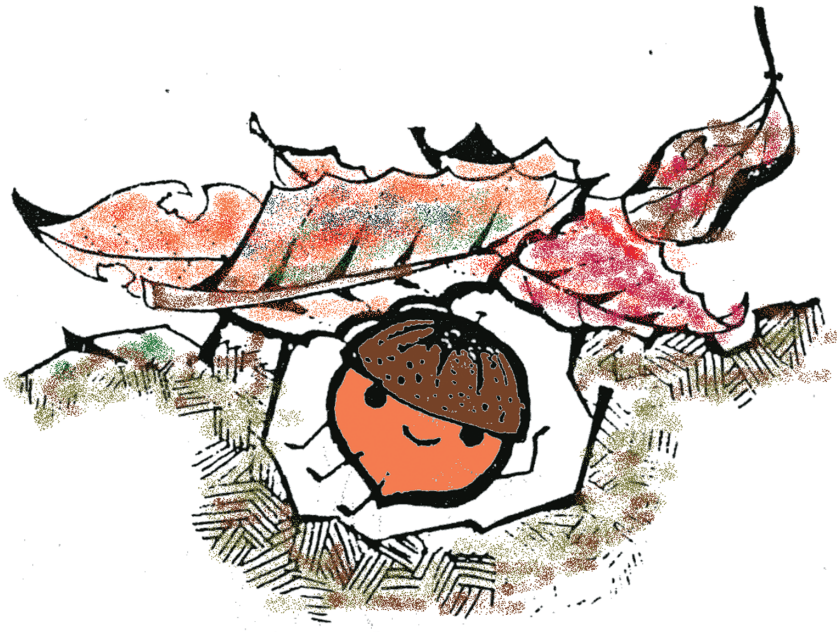
「そうだ、ぼうや、きみの　こえを　はこんであげよう。きっと、だれかのところに　とどくように。」

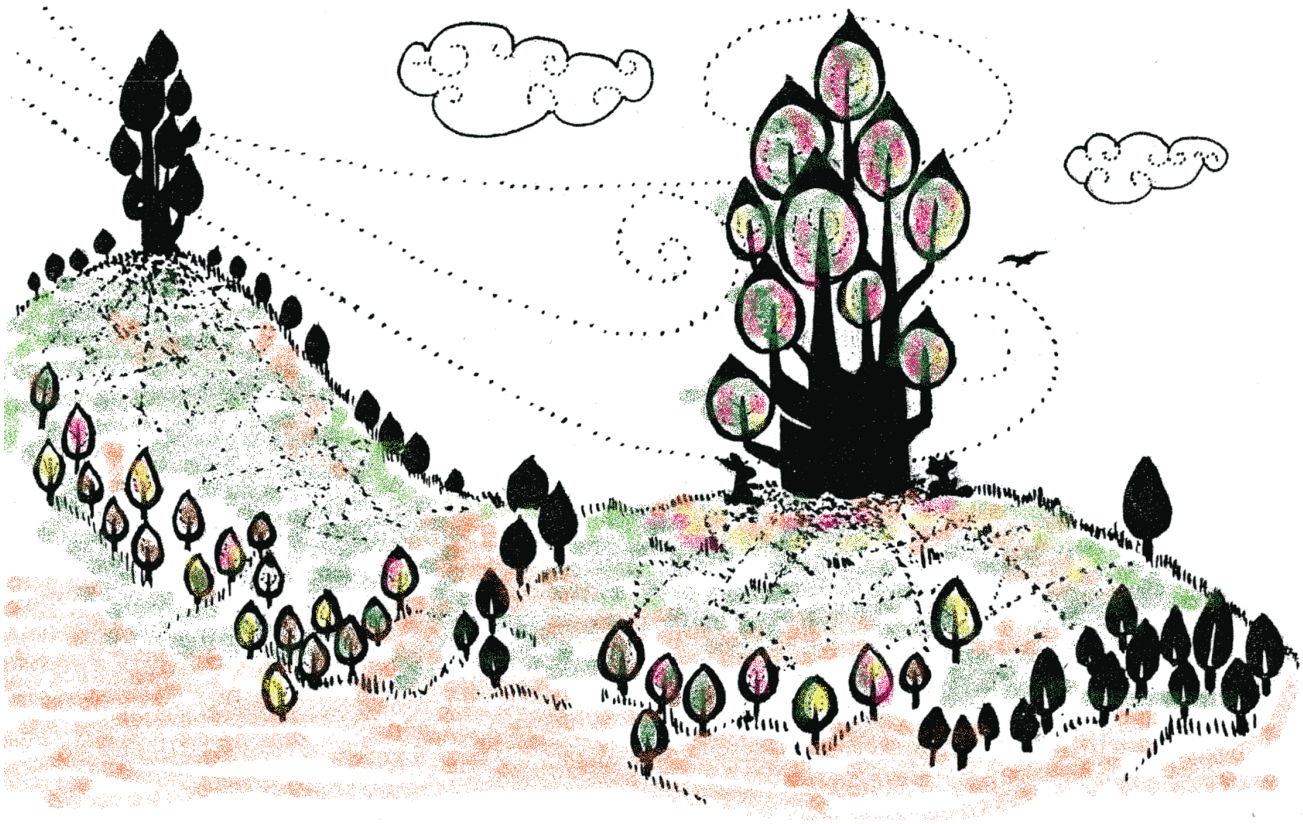
かぜは　こえを　のせて、たにを　こえ、やまやまの　あいだをぬけ、ながれて　いきました。

「だれか、ぼくを　たすけてえ。」

そのこえは　やまのなか　いっぱいに　ひろがりました。こえを　きいてとんできたのは、からすでした。
「ぼうや、たにから　だしてあげよう。」
からすは、そうっと　どんぐりを　くわえました。
いたくないように、そうっと。そうして、たかく　たかく　まいあがりました。

たにのうえで　まっていたのは　うさぎでした。
「さあ、わたしの　せなかの　けに、しっかり　つかまるのよ、ぼうや。」
どんぐりが　しっかり　つかまったのをみると、うさぎは　いそいではやしを　とおりぬけていきました。
　やがて　ついた　ところは　やまの　なかほどの　すこし　ひろくなっているひあたりの　よいところでした。
「さあぼうや、このなかで　おやすみ。そうして　おおきなくぬぎに　なるんだよ。」
そういいながら　うさぎは　ちいさな　ちいさな　あなを　ほりました。



　つちの　なかは　あったかでした。どんぐりは　そうっと　めをとじました。
　かぜは　このはを　はこんできました。　カサコソ　カサコソ。
「わたしたちは、おふとんに　なりましょう。どんぐりの　めがでて

くるまで。」
このはは　そういって、そうっとどんぐりの　うえに　あつまりました。あかや　きいろの　きれいな　おふとんに　なりました。
「ありがとう、ありがとう。」
と、おかあさんくぬぎの　こえが　かぜに　のって、やまいっぱいにひびきわたりました。
「ありがとう、もりのみなさん」
どこからか、かすかな　どんぐりのこえが　きこえてきました。
はるになると、どんぐりは　きっと　かわいい　めを　だすことでしょう。そうして、やがて　おおきな　おおきな　くぬぎに　なることでしょう。